

平成21年 5月25日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520250

研究課題名（和文） トマス・グレイのウェールズ研究ノート——「カンブリア」考察

研究課題名（英文） Thomas Gray' s study of Ancient Welsh poems- “Cambria”

研究代表者

片山 麻美子 (KATAYAMA MAMIKO)

大阪経済大学・人間科学部・教授

研究者番号：50183778

研究成果の概要：

グレイが1750年代に執筆した論文「カンブリア」における、①ウェールズの詩法の研究②ドルイドとバルドに関する好古的知識について考察した。特に近年の民族学や考古学の研究成果を取り入れ、18世紀のケルト民族起源論と国民意識に関する言説に焦点をあて、グレイがウェールズにおける古詩復活とバルドの伝統復活のなかで果たした役割を明らかにした。成果として、当時の好古研究の進展状況とケルト再発見の議論を検討し、グレイやメイソンの古詩研究と好古家の相互にわたる影響関係を跡付けて発表した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,100,000	0	1,100,000
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	240,000	2,840,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：英文学

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、グレイが詩人として社会に果たす役割を模索し、歴史研究に解決を求めた姿に注目する点で、これまでの叙情性を重視した詩人研究と異なる。18世紀中葉における古詩復活はロマン主義の発展の上で重要な役割を担っていたが、グレイが古詩収集の運動において指導的な役割を果たした事実は十分認識されていない。またグレイと彼らの相互の関わりから古代人の理想像が形成さ

れて、結果ロマン派へと受け継がれていった側面が考察されることも数少ない。当該研究は、従来古典主義とロマン主義という二つの時代の狭間で見過ごされてきた、18世紀中葉の価値と歴史観の転換を、グレイを通じて理解しようとするものである。

特に近年のナショナリズムと民族起源の議論を踏まえ、グレイの古詩への関心が、イングランドに統合されたスコットランド、アイルランド、ウェールズの祖先とされるブリトン人の

歴史に及んでいた点に注目している。グレイがイギリスの詩歌の起源を探索し古代の詩人像を造型していく過程は、文学研究だけでなく、広く文化・民族・歴史と関わる18世紀イギリスの精神風土の在り様の一つとして提示できるのでないかと期待する。しかし、学際的な視野を持つとともに、文学分野に独自の資料検討と作品・作家研究の遂行が重要だと考えている。

研究では、現在ではとりあげられることのないグレイの「カンブリア」“**Cambria**”やメイソンの『キャラクタカス』**Caractacus**だけでなく、ペズロン (**Pezron**) やローランズ (**Rpwlands**) など好古家の文献など、第一次資料からの検討をもとに議論を独自に進めた。グレイやメイソンがおこなった古詩研究やウェールズを扱った歴史テーマの作品は、当時のイングランドの立場によるイギリス統合の国民意識を示す。また一方で、スコットランドやウェールズの視点からはケルト文芸復興に対して影響を与えたと予測される。特に従来看過されてきたウェールズの古詩を考察する意義は大きく、アイルランドとスコットランド中心のケルト史観に新しい視点を取り込むことを目指した。

## 2. 研究の目的

当該研究はトマス・グレイが18世紀中葉における古詩復活に果たした役割を考察してきた。今回の研究課題は、「トマス・グレイのウェールズ古詩研究ノート——「カンブリア」考察」に定めた。古詩は、イギリスを形成してきた個々の民族の歴史を直裁に語り、土着の自然と靈性を素朴に称揚する。グレイの古詩研究が、自らの民族と詩歌の形成の歴史を探求し、民族精神の起源と独自性を提示する試みであったことを明らかにしようとした。

本研究では、作品や手紙、研究ノートなど第一次資料を中心に調査し、グレイの古詩研究と同時代の古詩収集家との協力による復活運動の実相を検証していく。全体の構想は以下のように集約される。カッコ内はこれまで受けた科研の年度を示す。

(1) グレイが古詩に関心を持つに至った経緯と古詩復活運動を概観・・・(H10年)

(2) グレイによるイギリス詩史執筆の試みと古詩再評価・・・(H10年)

(3) 1750年代のグレイ自身の古詩研究

ア. 古代ブリトン民族への関心と国民意識の高

まり——「詩仙」(**The Bard**)におけるブリトンの吟唱詩人の造型・・・(H14年)

イ. メイソンの『キャラクタカス』(**Caractacus**)執筆支援と自由の精神・・・(H14年)

ウ. イギリスの言語と詩歌の形成——「カンブリア」(**Cambria**)におけるウェールズの詩法研究

エ. 「カンブリア」におけるバルド、およびドルイドの好古的知識とモリス・サークル

(4) 1760年代の18世紀古詩収集家の活動への研究支援

ア. マクファーソンの『オシアン詩』

イ. エヴァンスの『ウェールズ古詩集』

ウ. パーシーの『イングランド古詩拾遺集』

エ. ビーティの『ミンストレル』

(5) 18世紀イギリスにおける古詩復活の背景と新しい詩歌の創造

本研究の全体構想は、グレイの古詩研究と復活の活動を調査することによって、18世紀におけるロマン派への価値転換、すなわち、自然、古代や中世という歴史的過去、また古典と対比された自国の素朴な古詩に対する再評価の様相を明らかにすることである。グレイがイングランドおよび周辺国家の古詩に関心を持った経緯、彼自身の古詩研究を調査し、同時代のマクファーソン (**Macpherson**) や、パーシー (**Percy**)、エヴァンス (**Evans**) などの古詩収集家へ与えた影響を考察する。イギリスが近代の市民社会へと変貌した18世紀において、古代社会の自然との関わりや民族の歴史のなかに新しい詩歌のかたちを模索したグレイの後期の文学活動を再評価することが最終的な狙いである。

今回の研究期間では上記(3)1750年代のグレイ自身の古詩研究のうち、「カンブリア」に関する課題(ウ)と(エ)を遂行した。「カンブリア」は「詩仙」を執筆した1750年代に書かれたグレイの研究ノートであり、ウェールズの詩法だけでなく、言語、歴史、風習にわたり広く考察を加えている。この研究ノートを詳細に検討することで、ウェールズの古詩復活に果たした役割を明らかにした。特に、イギリス詩は複数の民族の融合によって英語が形成され、ブリトン民族の詩法を内包する、というグレイ独自の詩観を検証した。さらにドルイドやバルドなど当時の好古研究の成果を如何に作品に活用したかを考察し、ウェールズの文芸復興全体に与えた影響を明らかにすることを目指した。

## 3. 研究の方法

グレイの古詩復活に果たした役割については 20 世紀初頭の Edward D. Snyder や William Powel Jones の研究が詳しい。しかし、1960 年代に書簡などグレイの研究が整備された後も、古詩復活に関しては再評価が進んでいない状況にある。

今回の研究では先行研究に加え、Linda Colley や Prys Morgan など、国民精神と民族の伝統を議論した歴史学と人類学の研究を視野に入れて考察した。古詩復活と密接に関わる、イギリスの民族起源探求の動き、ドルイドやバルドなどの好古研究の進展との関連を追及した。特にナショナリズムと民族主義の視点からウェールズの文芸復興を検討し、グレイの古詩研究と古詩復活への影響力を再評価した。

本研究は全体構想(研究の目的 p.2 を参照)のうち、以下の第 3 項目を課題とし、グレイの備忘録(未出版)のなかの「カンブリア」と題する研究ノートに特化して検討した。

### (3) 1750 年代のグレイ自身の古詩研究

ウ. イギリスの言語と詩歌の形成——「カンブリア」におけるウェールズの詩法研究  
エ. 「カンブリア」におけるバルド、およびドルイドの好古的知識とモリス・サークル

初年度では「カンブリア」の音韻論を中心とした記述を中心に、次年度以降は、グレイが「カンブリア」を記述する上で参考にした、モリス兄弟を中心とする好古的な研究の進展状況を考察する。グレイの古詩復活と関連させて、ウェールズの伝統の保護にあたったモリス兄弟、特にエヴァンス、ローランズの古詩復活やケルトに関する知識を検証した。

研究の前半において最も重要な案件は、グレイの備忘録における「カンブリア」と題したウェールズの音韻論である。これはマクファーソンの『オシアン詩』やパーシーの古詩拾遺集が発表される 1760 年以前に描かれた論文である点で、当時の古詩復活運動において先駆的な研究であったと位置づけられよう。しかしながら、この論文は 20 世紀初頭に一度活字化されたにもかかわらず、グレイや古詩研究のなかで看過されている研究対

象のひとつである。

本研究ではこの「カンブリア」を検討することで、グレイのウェールズの古詩への理解を考察するだけでなく、古代ウェールズ語、すなわちブリトン民族の言語がイギリスの言語と詩歌に与えた影響をどう位置づけていたか、を考察した。

研究計画の後半では、グレイが「カンブリア」や「詩仙」を書くうえで典拠とした、18 世紀ウェールズの好古研究家の活動を調査した。当時の文献のなかのバルドのイメージを明らかにし、「詩仙」であらたに加えたグレイの独創性を考察した。ウェールズの文化研究は、わが国でもアーサー王伝説が中世研究で取り上げられてきたが、18 世紀から 19 世紀におけるモリス兄弟やイオロ・モルガニッグなどの伝統文化復活の運動は今後さらに研究の成果が待たれる分野である。これらウェールズに関する近年の研究成果を参照しつつ、グレイが活用した当時の好古研究の文献など第一次資料を中心に検討を進めた。18 世紀のイングランドだけでなく、ウェールズの歴史やケルトに関する最近の学際的な研究成果を参照して、グレイの古詩研究がウェールズの文芸復興に果たした役割を明らかにするよう努めた。

以下に主な研究方法と経費の使用計画を示す。

(1) 文献整備のための設備費と消耗品費  
グレイの文献のうち、備忘録「カンブリア」の音韻論の記述を中心に検討した。この草稿は先回の補助金支給でマイクロフィルムを購入しているので、これらを印刷し考察を進めた。なお 20 世紀初頭に Roger Martin が「カンブリア」の草稿を読み取り、出版しているので作業の参考にした。(Chronologie de la Vie et de l'oeuvre de Thomas Gray, Les Presses Universitaires de France, 1934.) またメイソンとウォルポールの書簡集や、彼らの作品の資料整備をおこなうための文献コピー代、古書、および近年の研究書などの書籍購入に対して補助金を使用した。

同様に、ウェールズ関係の資料を整備した。ウェールズに関しては、最近の研究書によって理解を深めるため、和書やイギリス、ウェールズの文献、論文による検討をした。最後に古代ケルトに関する文献を 18 世紀当時の資料と、最近の研究書による文献の両面から検討した。特に当時の好古研究書のうち、

グレイやメイソンが参照した文献を中心に復刻版やマイクロフィルムからの印刷などによって資料整備をおこなった。このための経費に補助金を当てた。

18世紀におけるケルトに関する言説は好古研究の進展に伴い変化している。グレイのケルトの知識を正確に理解するためには、当時の好古研究、歴史書などの文献を直接参照することが重要で、近年のケルト研究の文献と区別する必要があると考える。従って、原則としてグレイの時代の好古的な文献を第一次資料として検討を進めた。

これらの文献調査のなかには、「詩仙」やメイソンの『キャラクターカス』で参照された、**Thomas Carte, *A General History of England*, 4 vols. London: 1747-55** や **Henry Rowlands, *Mona Antiqua Restaurata, an archaeological discourse on the antiquities, natural and historical, of the Isle of Anglesey*. Dublin, 1723. John Davies, *A History of Wales*. London: Penguin Books, 1990; 1993.**などが含まれる。また、17世紀の**Aylett Sammes**などケルト関係の文献も必要に応じて漸次整備した。

(2) 資料収集のための海外および国内出張旅費

研究は資料収集のため、イギリスへの渡航と、国内での文献調査が必要である。そのため、イギリス・ロンドンでの大英図書館、および、ウェールズでの文献調査のための旅費に補助金を使用した。なお、上記のとおり、グレイの備忘録に関しては、マイクロフィルムを先回の補助金で購入しているので現在資料の検討は可能である。しかし草稿を製本した原本が所蔵されているケンブリッジのペンブローク・カレッジに文献調査に赴いた。また、最近では電子文献の整備が著しいが、本務校で**Eighteenth Century Collections Online**などを利用できないため、大英図書館とオックスフォード大学図書館に通った。こうした電子文献は将来的に国会図書館などで有料での利用ができるよう希望している。

(3) 専門的知識の提供に対する謝金

当該研究者はウェールズ語を理解できないため、ウェールズの研究者の助言を得て、最近の研究成果を踏まえつつ、18世紀における民族意識と文芸復興、また古代ケルトの好古趣味がどのような状況で発展していったのかを考察した。したがってウェールズの1

8世紀の文芸復興に関しては、これまでと同様、ウェールズ・アベリストゥイス国立研究所の**Mary-Ann Constantine**博士に引き続き指導・助言を受けた。博士はオシアン（注）のウェールズでの受容から19世紀のイオロ・モルガニッグまでこの方面での研究の第一人者である。今回は適切な謝礼を支払い、協力に感謝することができた。

(4) 成果発表のための出張旅費、外国語論文の校閲代としての謝金

研究の遂行で得られた成果は、研究会や学会での口頭発表や、また論文などによって漸次公表し指導を仰いだ。このための出張旅費を使用した。

(5) コンピューターの購入

資料収集のため携帯する手持ちのノートパソコンが耐用年数の5年を過ぎたため、新しい代替のパソコンを購入した。この機器は数度の渡英に常に携帯し過酷な使用条件の中役立ってきた。

#### 4. 研究成果

本研究では「カンブリア」を中心に、グレイの古詩研究とウェールズの古詩復活や文芸復興とを相対させ、グレイが与えた影響と役割を明らかにしてきた。まず初年度にグレイの古詩研究のなかで重要な論文である「カンブリア」を取り上げ、グレイがウェールズの古詩の詩法と言語の特徴をどう捉えているか、を資料中心に検討した。さらに次年度で、18世紀のケルト民族起源説に着目し、グレイが助言を与えメイソンが描いた『キャラクターカス』における古代ブリトンの詩人であるバルドとの関連を跡付けた。また最終年度でグレイの「詩仙」で描いたバルドのイメージが、ウェールズの伝統文化のなかで活用された足跡をロマン派のイオロ・モルガニッグの時代まで検討した。これによってイングラント出身の二人の詩人がウェールズの民族意識と伝統の復興に与えた影響と、ふたつの民族意識の違いによる差異を考察した論文と口頭発表をおこなった。

以下に年度毎の研究成果を具体的に記述する。

(1) 初年度の平成18年には、グレイが1750年代に執筆した「カンブリア」と題する研究ノートに特化し、ウェールズの詩法研究に関する記述を中心に、グレイの言語観と詩観を考察した。またケルト文芸復興の萌芽期における好古研究の

進展状況に関して引き続き調査を進めた。

成果としては、①「死者を語る墓碑——グレイの「挽歌」と姉妹芸術」を日本ジョンソン協会編『十八世紀イギリス文学研究3』に所収し出版した。牧歌詩および寓意画による「挽歌」への影響を考察し、グレイが過去から未来への時間的継続性を強く意識していることを論じた。グレイはこの後精力的に詩歌の歴史研究を進めている。②2007年9月の関西コーリッジ研究会では、「初期ワーズワスとウィリアム・メイソン——古代の表象をめぐる」と題し、ワーズワスに対するメイソンの影響とその後の離反を検証し発表した。ワーズワスは『叙景小品』で、メイソンの『キャラクタカス』の詩文を引用し神秘的な古代人の精神を称揚する。一方、フランス革命が恐怖政治へと傾斜しゴドウィン の 理性主義の影響を受けるに並行して、『ソールズベリ平原』でドルイドの迷信性と残虐性を批判する古代表象の変化が起こったことを跡付けた。③他に、2007年3月の関西アイルランド研究会では、「トマス・グレイとウェールズ——18世紀ブリティッシュネス——考」と題し、最近のケルト再考の議論を踏まえ、グレイの古詩研究の背後にある歴史観と当時ウェールズに芽生えた好古研究の状況について口頭発表した。

(2)平成19年度には「カンブリア」の記述とともにグレイが「詩仙」で描いたバルドと、メイソンがさらに前景化して描いた『キャラクタカス』におけるバルドとドルイドの知識がどのようなものであったか、を検討した。彼らが理解したケルト社会に関する知識と、彼らが作品で描いた造型上のイメージとを比較し、グレイたちが18世紀当時のイングランドおよびウェールズ、スコットランドの読者に発信した古代社会の指導者たちの姿を考察した。特に、トマス・グレイの古詩研究が古詩の収集にとどまらず、イギリスという国家形成と詩歌の歴史を探求し、民族の起源と独自の精神性を提示する試みであったことを明らかにした。国内外のケルト研究を参照し、グレイが18世紀のケルト民族意識の形成と深く関わったことを裏付けた。

成果として、①「民族とことば……イギリスにおける古詩復活運動と民族意識の形成」と題し、18世紀半ばの古詩復活運動とケルト民族起源論を関連させ論じた。(『人間科学研究』第2号)グレイ、メイソンの作品がウェールズのケルト民族起源論に影響を受けていた点、マクファーソンの『オシアン詩』がスコットランドの古ゲール語の

詩を復活するとともに、ケルト民族起源論を敷衍していたことを論じた。また新しい知見として、プリス・モーガンの伝統の創出の議論を踏まえ、ウェールズの古詩復活が、17世紀後半以降のウェールズにおける社会変化と伝統喪失の危機に起因していた点で、マクファーソンに共通することを論じた。

これまでナショナリズムの視点から古詩復活を議論してきたが、本年度は、考古、歴史、文化人類学で学際的な論争となっているケルト民族起源論の研究成果を取り入れ、当時の古詩復活の担い手が民族起源に強い関心を抱き、影響を受けていたことを論じた。

(3)平成20年には、「カンブリア」の記述の検討を受けて、グレイとメイソンがウェールズの文芸復興に果たした役割を考察した。改めてプリス・モーガンなどの議論を参照しながら、17世紀末から18世紀、さらに19世紀にかけて展開したウェールズの文芸復興の過程を概観した。

まず、近年の民族学や考古学の研究成果を取り入れ、18世紀における好古研究の進展状況とケルト再発見の議論を調査し、グレイやメイソンと好古家の相互の影響関係を考察した。さらに、グレイの古詩復活と、古代ケルト社会の研究が、19世紀初頭に文芸復興運動を推進したイオロ・モルガニックの民族の伝統復活と創成に直接、間接に与えた影響を検討した。モルガニックは古代ケルトのドルイドとバルドの伝統を創造し、ウェールズの文化祭典であるアイステツズウォオッドの儀式に結びつけた。彼以後ウェールズに特有のバルドのイメージが彼らの文化のなかで引き継がれていった。ウェールズの伝統復活を長い時間軸のなかで省みることによって、グレイがウェールズの古詩復活、およびバルドの伝統復活のなかで果たした役割を考察した。

成果として、「古代ブリテンの表象——メイソンとケルトの再発見」と題し、『キャラクタカス』におけるドルイドとバルドの描写を検討し、当時の好古的研究による影響を跡付けた論文を2008年10月にイギリス・ロマン派学会全国大会で発表した。論考はメイソンがグレイの助言を受け、古代ローマの文献のほか、ローランズなどの18世紀のケルト文献を活用していた事実を裏付けた。特にメイソンはイングランドとウェールズを民族的に区別するケルトの呼称でなく、エリザベス朝以来の伝統的ブルータスの起源説とブリティッシュという呼び名の使用にとどめている。近年のケル

ト学における呼称の議論(**Collis, *The Celts***)を考慮すれば、作品はイングランドを中心とした当時の統合的な国民意識に関わる姿勢を示している重要と考える。

**(3)連携研究者**

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1件)

片山麻美子、「民族とことば・・・イギリスにおける古詩復活運動と民族意識の形成」

『人間科学研究』第2号、**pp.87-99,2008年**,査読なし。

[学会発表](計 3件)

**(1)**片山麻美子、「古代ブリテンの表象——メイソンとケルトの再発見」イギリス・ロマン派学会全国大会、**2008年10月**、四国大学。

**(2)**片山麻美子、「初期ワーズワスとウィリアム・メイソン——古代の表象をめぐる」関西コールリッジ研究会口頭発表、**2007年9月**、同志社大学。

**(3)**片山麻美子、「トマス・グレイとウェールズ——18世紀ブリティッシュネス考」関西アイルランド研究会口頭発表、**2007年3月**、大阪経済大学。

[図書](計 1件)

片山麻美子『十八世紀イギリス文学研究3』「死者を語る墓碑——グレイの「挽歌」と姉妹芸術」、開拓社、**2007年5月**出版、査読あり、**pp.82-101**。

6. 研究組織

**(1)研究代表者**

片山 麻美子 (**KATAYAMA MAMIKO**)  
大阪経済大学・人間科学部・教授  
研究者番号 **50183778**

**(2)研究分担者**